

巻頭言

独創性、国民性、気候風土

葉 原 耕 平



昨今、独創性とか大学発ベンチャーの掛け声がかましい。アメリカでのITの発展などに刺激され、それではわが国でも、という追従型の発想のように思われる。では日本人に際立った独創性があり、あるいは期待できるだろうか。日本発のOS “TRON” を提唱・開発した坂村健さんは「日本人にビル・ゲイツを期待するのは無理だ。そもそも日本人は欧米人に比べてセロトニンの分泌量が桁違いに少ない。それにもかかわらずそれなりに世界に伍してやってきたのはなぜか。それを大切にすべきだ」という。今NHKの「プロジェクトX」が驚異的視聴率だ。総じて、卓越したひらめきと合わせてチームワークと忍耐努力の勝利、というお話が多い。坂村さんの設問に対するひとつの答えがここにあるのかもしれない。

話は一転して9. 11テロ以降のアメリカ、ことにブッシュ大統領の有無を言わず二者択一をせまる二元論的、二分法的、かつ強者の論理。イスラムに詳しい片倉もとこさんは国民性を大きく3つに分類している。まず日本社会は「性善説」。そして近代西欧社会は「性強説」。人の意思あるところ何事も可能である、という考え方。それに対してイスラムを信仰するムスリムは「性弱説」。人間は本来弱いものだから誘惑にも負ける。アルコールはご法度だが、それはアルコールがあれば人は飲みたがるのが自然、あとで酔っ払い運転をとがめるよりはじめから飲ませない方がいいという発想だと片倉もとこは述べている。一方、彼らがもっとも大切にするのは沈思黙考の時間とその態度、彼女はそれを「ゆとり」と「くつろぎ」から合成して「ゆとろぎ」ということばで表現している。

ではなぜムスリムあるいはアラブの人々は「性弱説」なのか。それはあの広漠とした砂漠では人間は自然の力には到底及ばないちっぽけな存在で、せいぜい自然に逆らわずに住まわせてもらう以外にはない、ということの現われだという。そして、砂漠の生活では下手に動き回って体力を消耗するのは愚の骨頂、一発勝負で嗅覚鋭くオアシスを探し当てる、ということが大切だ。そのためには常に沈思黙考する。次に日本人の「性善説」つまり「お人よし」だ。その根っこは多分最後は水と緑があり何とか生き延びることができる、さらにはすべては「水に流してくれる」という甘えにまで通じる、という識者もいる。ちょこまかと目先のことを処理することには長けるが、アラブのように生死をかけてオアシスを探し当てる、という厳しさはない。そして西欧社会の「性強説」。私には、12世紀前後キリスト教が「大開墾時代」といわれる時期にヨーロッパを西に席卷していった折、牧師が先頭に立って豊かな森をなぎ倒したように、やれば何でもできる、という過信に陥ったことが遠因のように思われる。

世界にはGDPが低く傍目には貧しい国々がたくさんある。しかし、そこに暮らす人々の精悍な姿、輝く目などを見聞きする一方で、疲れ果て電車の中で眠りこける日本人を対比すると何が人々にとって幸せか、改めて考えさせられる。何かが欠けている、何かがおかしい、それは何なのか。

これからの世の中では苦しくてもその「何か」の模索が求められるように思えてならない。それは「性強説」の欧米型追従の手法の延長上では得られないような気がしてならない。そのヒントのひとつは長い歴史にもまれ競争・共存の中で培ってきた京都の文化にあるのではないか。多少は「お人よし」でもいい、自然の摂理に従った別なアプローチが求められる。けいはんな学研都市のATRで基礎研究のマネージに携わり、10年余の経験を経てつくづくと感じたことでした。

(元ATR (国際電気通信基礎技術研究所) 副社長、現顧問)